

すぎなみ暮らし塾公開講座～30代からの未来プロデュース

「だから阿佐谷ジャズストリートは面白い」

講師：鳥山千尋杉並区年整備部まちづくり担当部長

平成 18 年 9 月 15 日

矢郷恵子さんより

公開講座の「だから阿佐谷ジャズストリートは面白い」講演に来ていただいてありがとうございます。今日、まちづくり担当部長鳥山さんがホストといたしまして、楽しい話が聞けると思います。これもう12年位続いているジャズ祭なんです但实际上にジャズフェスティバル行った事ある人って何人いらっしゃる。結構いらっしゃるありがとうございました。

今日は、どうしてこういうジャズフェスティバルが生まれ来たのか、またどういう人達が参加してフェスティバルが作られているかお聞きしようかと思います。なんか抽選で豪華プレゼントが当たりますのでどうぞ楽しみにして聞いてくださいお願いします。

鳥山千尋さんより

改めまして区役所の都市整備部まちづくり担当部長をやっております鳥山と申します。今日は、7分間くらいのビデオを持参しました。これは広報課が12年前に収録したビデオでありまして、当時は、まちづくり推進課長をやっていました。その時に阿佐谷ジャズストリートというフェスティバルをまちの人と一緒にやろうよという事で始めました。それを見ていただきたいと思います。それから私が撮った写真を見ていただく予定にしています、それじゃ始めましょうか。

第一回阿佐谷ジャズストリートのVTR要約

今回は昨年の秋、阿佐谷の町を舞台に行われました阿佐谷ジャズストリートの様子をご紹介します。

どこの誰が言ったのか杉並のまちを音楽でたとえると、荻窪はクラシックそして阿佐谷はジャズとなるそうです。そんな阿佐谷のまちをジャズで一杯にしようと阿佐谷ジャズストリートというイベントがひらかれました。JR中央線・阿佐ヶ谷駅前駅周辺の喫茶店などには、多くのジャズメンやファンがおとずれ阿佐谷のまち、通りがジャズの音色につつまれました。阿佐谷は戦前から文士、作家など多くの文化人が住むまちでしたが、とりわけ戦後は、多くのジャズメンを輩出してきました。これが阿佐谷ジャズストリートを始めるきっかけになりました。阿佐谷北2丁目にあるジャズクラブ「マンハッタン」オーナーの望月保孝さんは阿佐谷ジャズストリートの実行委員をつとめています。「国立音大の学生さんの中でジャズメンをめざしている人たちなど

が 10 年前からここでライブをやっていました。演奏していた方々のなかには有名になった人もいます。今回のように手伝ってもらえて感慨無量です」。この日阿佐谷ジャズストリートの実行委員が集まり打ち合わせを行いました。この実行委員会は阿佐谷在住のジャズ関係者や阿佐谷のまちづくりを考えるメンバーが集まってつくられました。もちろん、みなさんは大のジャズファンクラブです。実行委員は四ヶ月にわたって出演者の交渉や会場の手配、阿佐谷の商店街に協力を呼びかけるなど、積極的な活動を展開してきました。チラシを駅の周辺で配ったりしました。一生懸命に努力をしたおかげで切符を買いたいと電話での申し込みもたくさんありました。いよいよ阿佐谷ジャズストリートの当日がやってきました。実行委員は朝から準備に追われます。この日のイベントには日本を代表するジャズメンを始めビッグバンドなどのメンバー 130 名が阿佐ヶ谷駅中心に 16 箇所の会場でライブ演奏やジャズパフォーマンスなどを行いました。また、主な会場のほか、スポーツ店や散髪屋さんなど、商店街で BGM でジャズを流すなど、阿佐谷のまちはジャズ一色に染まりました。望月さんのお店でも演奏が行われ大勢のお客さんが訪れました。「開放感があって楽しくやっています」「マニアではないお客さんがいっぱいいらっやいまして、たのしいですね」。

また、杉並第一小学校の体育館では演奏者と観客が一つになってジャズを楽しみました。「結構盛大にやっているのが驚きました」、「日本中のジャズファンにこの阿佐谷のジャズを知っていただけるといいと思います」。まちがジャズで彩られた阿佐谷ジャズストリート、ジャズを愛する地域の人達とミュージシャンの気持ちが阿佐谷のまちに新しいイベントを生み出したようです。

鳥山千尋さんのお話(会場のスクリーンにパワーポイントの画面を映しながら)

第 1 回イベント当日の小学校のジャムセッションは大規模になり、300 人のお客さんが入っているところで最後の締めくりになるのですが、そのパターンは今でも変わりなく続いています。最初はミュージシャンが 140 人ぐらいでしたが、今は延べ 300 人ぐらいになって規模は倍になっています。会場も 20 程度から、30 数箇所に広がっている。現在ではお客さんも数万人でしょう。毎年、10 月の最終の金・土にやることになっています。阿佐谷は 8 月のはじめに七夕祭があります。9 月には神明宮の神輿祭がある。9 月に何か企画を持っていっても商店街の人たちは上の空なのです。9 月と暮れの 12 月の間、商店街が暮れの大売出しをやる前にジャズストリートをやろうということになりました。場所をどこにするのか。区役所のある青梅街道から早稲田通りまでの中杉通りの景観を大切に作るまちづくりに私は取り組んでいました。まちの人たちと私を含めた職員が夜遅くまでまちづくりの話をしていたときに、緑の景観の中でジャズを聴いている人たちのイメージが浮かんできたのです。阪神・淡路大震災やオ

ウムの地下鉄サリン事件があった年で、春からいろいろと大きな騒動がありました、ちょうどその頃の話です。阿佐谷のまちをもっと綺麗にしていきたい、建物を建て直すならまち並みを綺麗にするような建物にして欲しいなど、の提言をまちの人たちが主体となり、まとめていました。

阿佐谷ジャズストリートとは

- ・阿佐谷のまちをジャズの響きで一杯に
- ・まちをジャズで丸ごと楽しむ
- ・JR中央線の秋の風物詩にする
- ・マーサ三宅、山下洋輔さんなど、延べ 300 名が 30 箇所あまりで演奏する
2006 年で 12 回目、ということです

ジャズストリートイベントの三つの特徴は

- ・まちの人々の手づくりで(実行委員会方式)
- ・阿佐ヶ谷駅周辺で多会場方式(30 箇所あまりで演奏する)
- ・聴いて回る、共通券(パスポート)方式、大きめの会場・10 箇所余りを対象に

< どうして多会場方式にしたのか >

阿佐谷界隈のまちを歩き、楽しんで欲しい。阿佐谷のまち全体が快くお客さんを受け入れる体制をつくりたいと考えました。

実行委員会の仕事はそれだけ難しくなるが、反面とても面白い、楽しめる。

< どうして、共通券を発行したのか >

2007 年 10 月 26 日(金) 27 日(土)の場合、1 日券と 2 日券がある。

パブリック会場(13 箇所)、無料ストリート(7 箇所)、ライブハウスなど(20 箇所)で演奏が行われるが、共通券はパブリック会場を出入り自由となっている。

当初の共通券は、全会場で出入り自由としていたが、経費、人練りの面で難しいことが分かったので、現在の方式になった。個々の店は、自分たちのやり方を工夫して営業している。

つなげる、むすぶがキーワード

- ・有志と有志とを結ぶ
- ・まちの人々と区の職員をむすぶ(職員は裏方)

- ・個人個人のツテをむすぶ、つなく
 - ・ジャズの魅力とまちの資源をつなく
- つなげる、むすぶ、が始まりです

今だから言えるのですが、まち歩きとジャズを一緒に楽しもうということです。イベントの当日は、区役所の前でディキシーバンドのねり歩きからスタートするのですが、区民の方々にたくさん来ていただき、楽しんでいただきたいとの思いで始めました。毎年、阿佐谷ジャズストリートのオープニングは、金曜日の昼から区役所前から始まるのですが「さあ、これから始まるぞ」という景気付けをしています。

これは、杉並第一小学校体育館付近の様子ですが、土曜日の夜9時ごろジャズを演奏した方々が集まって「少し物足りないからもう一寸やろう」と簡単なテーマをもとにアドリブ演奏をしているところです。つぎからつぎへとミュージシャンが代わって演奏する。延べで10人から30人くらい加わって「次は私の番だよ」と演奏を続ける。だんだん盛り上がっていくわけです。これはなかなか大きな会場でないといけないことです。

阿佐谷ジャズストリートの三つの特徴とわたしは思っているのですが、第一は、まちの人々の手づくり実行委員会方式です、特定のイベント会社に任せてしまうのではなく、自分たちで実行委員会を結成して企画を立ててやる。

二番目ですが、阿佐谷は大きなホールがない。荻窪には1200人入れる杉並公会堂ホールがあるが、阿佐谷にはないのです。いろいろ知恵を絞りました。まちのいろいろな会場をつなく、使えるものは何でも使っちゃう、そしてみんなで楽しもうよということで多会場方式を採用しています。

それから三番目の特徴は、共通券方式です。パスポートと言っているのです。チケットを売って行事をやると、税金を納付する仕事が出てきて大変になる、また、演奏に関わる著作権の関係で、たくさんのお金が動くことになる。このイベントはビジネスでやるのではなく、自主的な文化的なまちおこしとしてやっているのです。ちょっと大きめの会場として中杉通りにある細田工務店のロビーも会場にさせていただき、多会場方式でやっています。私は、毎年会場整理のお手伝いをさせていただいていますが、この十数年来マーサ三宅さん、山下洋輔さんのステージを始めから終わりまでのすべてを聞いたことがありません。いつも何かあったとき、ドアを空けて皆さんを避難させることを思い浮かべる。また、皆さんが残すゴミをどうしたらいいのかなどいろいろ考えるので、なかなか楽しめません。イベントを仕掛けるという失礼な言い方になりますが、裏方として別の楽しみがあります。皆さんが喜んでくださり、「よかった、よかった」と喜んで、「評判がいいよ」と聞くと嬉しいし、「会場に入れなかった、お前たち

なにをしているのか」と聞くとつらいことも事実ですが、「まちおこしの流れを作る」という裏方の楽しみがあると考えています。裏方にはお客さんとは別の楽しみ方があると考えていく。ステージの一番いいところに座っていることはできないということです。

つぎに、実行委員会は、委員などの出入りは低い垣根であることを意識しています。たとえば、ボランティアをしたいという希望者は拒まない。一方、去るものは追わずということで、低い垣根でお手伝いをお願いしています。

チケット(パスポート券)で運営しているイベントなので、赤字が出る場合があります。ミュージシャンは、安いお金で、いわば手弁当で演奏していただいています。山下洋輔さんならふつう1ステージ百万円以上の出演料にもなるのではないのでしょうか。ピアノはクレーン車で運んでくる、音響関係の機材や照明機材等も運んでくる、そのような費用が結局山下サイドさんの負担となっているのです。山下さん始め、出演者の皆さんは、実質赤字で演奏してくださっていると思います。ほかの何かで補充してさしあげないと気の毒な状態です。

また、阿佐谷ジャズストリートの場合、会場が非常に密集していますので、ごちゃごちゃしている面白さがあります。共通券方式ですが、最初の頃の会場は20ぐらいありました。全部の会場に入れるパスポートを発行しました。また、実行委員会は、小さな会場でも入場券の販売からプログラムの配布まで全部面倒をみますということで活動したのです。しかし、会場ごとに事情が違うので、実行委員会の手に余ることがたくさんできました。たとえば、お店には常連さんがいますので、店のオーナーの一部ですが、常連さんがパスポートを持っていなくても入れてしまう。普段より飲みものの料金を高くする。パスポートや当日チケットもあまり熱心に売らないのです。苦情が続々と出てきました。「実行委員会は入場するお客さんの整理のための人も出してくれるんでしょうね」と言われても、対応が難しいのです。そこで大きな会場だけは共通券で何時でも聞けるようにということにしたのです。

ところで、わたしはこのイベントを立ち上げた最初の10人くらいの中の一人です。5回目まで実行委員会のメンバーとして運営やいろいろな企画を担当しましたが、何時までも区役所の職員が入っているのもどうかと考えると、いまでは「側面支援」という感じでお手伝いをしています。

「つなげる」、「むすぶ」がキーワードのイベントですから、区役所の職員にたちかえって役割を果たしていくほうがよいと考えたのです。

つぎに裏方として区役所の三羽カラスの話をしていきます。今でも続いています。区役所の三羽カラス(三バカ・ラス)というのですが、この三羽(あるいは三人のバカ)がいなくてこのイベントはできないということです。「このイベントに直接資金を出すことはできないけれど、側面支援はします」と、当時の区長が議会で答弁しました。そこで関連する当時の三つの部署の課長

ががんばりました。わたしは、まちづくり推進課長だったのですが、「阿佐谷をもっと魅力のあるまちに」との趣旨から三人の課長が集まりました。私と地域文化の振興担当である文化・交流課長と「元気のある商店街づくり」の経済課長の三人です。そして阿佐谷の資源を結びつけることが使命と考えました。阿佐谷のパールセンター商店街にはそれなりにいいお店が揃っていることもあり、なぜか阿佐谷にはおしゃれな女性も多い。そこにジャズの人脈、まちづくりの人脈等をつなげるわけです。

阿佐ヶ谷駅北口にスターロード商店街が駅沿いにあります。そこにある小さなジャズクラブのオーナーが進駐軍の基地でピアノを弾いていた。そのオーナーが自分の店で若い人にライブをする機会をつくっていたのです。そのようなジャズの人脈は、とても大きいのです。マーサ三宅さんの門下生の方々とか、山下洋輔さんのツテだとか、幅広いアーティストと徐々に人脈が広がっていきました。

阿佐谷ジャズストリートにこのようなご縁で出演するミュージシャンはたいへん多いので、彼らのなかで、今頃になると、「阿佐谷のどういうところで出ているんだい？」といったことが合言葉のようになっている、と聞くととても嬉しくなります。

それからまちづくりの会の話ですが、1年、2年とまちの人たちと話をしているうちにメンバーが固定してくる。このメンバーは公募なので、地域の会社の役員さんとか社長さんとかも入ってきます。こうした人たちのなかから、最初の5年間は阿佐谷北6丁目の町会長の廣川さんにジャズストリート実行委員会会長を担っていただきました。何にもしないでいいですから是非代表をやってください、我々が廣川さんを担いでやっていきますからといったのですが、段々そうはいかなくなり、随分ご迷惑をおかけしたのではないかと思います。地元の人たち、区の職員と音楽関係者などが心を一緒にして集まってできたのが阿佐谷ジャズストリートだったと思います。また、レコード会社の協力もいただかなければミュージシャンが自由に阿佐谷のイベントに来ることができなかつた。いまでも、マーサ三宅さんが出演しているのですが、勝手に写真を撮ることはできません。VTRも撮れません。そういう契約になっているのです。ふだんわれわれが考えるような簡単なことではない、ということを理解していただきたいと存じます。それに会場の設定が阿佐谷でよかった。阿佐ヶ谷駅前、今年は、ジャズストリートの前宣伝をしようと小さな青空演奏をやったのですが、スポーツ用品店のご主人が女性の格好をして会場を盛り上げていただける。このようなことも必要なことです。こういう方がいるから面白いのです。この方は、第一回目から真面目な顔をしてしょっちゅう私のところにいらしていた方です。区役所職員も、土曜日なら一緒に手伝いができるので、記念グッズを売ったりしながら、チラシを配っています。

阿佐谷ジャズストリートのおもしろさは何かと申すと、人と人とのつながりと同時に空間

のつながりが魅力です。神社、お寺、教会、何でもかんでもつながってしまう。学校もつながる。目に見えないイベントというものでつながる。会社のロビーで素敵なコンサートができる。区役所のロビーでも職員がラッパを吹いている。阿佐谷のまちはこういう面白さがあるのです。阿佐ヶ谷駅の南口広場のバス停留所ですが、実際にここは広場ですが、広場は、道路と同じ扱いの許可が必要です。その許可は区役所の土木部門が担当です。いつもの広場は噴水が出ているのですが、その音が邪魔になるので、この日は演奏の時間に合わせて噴水を止めてくれています。

つぎの画面ですが、記念グッズを作って販売して楽しんでいます。Tシャツ、バッグ、腕時計など素敵なデザインをする方が阿佐谷にもいて、一個 1000 円から 1500 円くらいで結構売れるのです。記念グッズはお土産ということですが、むしろ思い出ですか。集めている人もいます。記念グッズは話題になるのでイベントの媒体としてなにか強いものがあります。当然、売り上げは、イベント原資の一部にさせていただきます。

私は、杉並区職員ファンクラブという組織をつくっています。10 年ほど前に発足しました。区役所の職員有志が中心となり、家族、友人が参加しています。ゆるいつながりですが、毎年記念グッズをつくっています。本日、バッグなど 2、3 持ってきましたので、後で抽選で差し上げたいと思います。私が絵を描いたバンダナも持参しました。お弁当を包んだり、風呂敷代わりに使っているものです。本当は、マーサ三宅さんにサインを書いていただいたりしてプリントすればいいと考えたのですが、商標権の関係などで実現できません。

区役所職員のファンクラブで勝手にグッズを作るわけにはいきません。実行委員会の会長さんや役員さんのところに行って、売り上げは、いろんなかたちでイベント資金として使いますからということで了解を得ています。このお金は、プレ・イベントの出演料とかお花に使わせていただいています。それから会場のお手伝いに職員が行きますので、昼食のおむすびを買ってきたりするのに役立っています。今年は、昨年に引き続きレトロ感覚のオリジナル・ショルダーバッグを制作販売します。

失敗もたくさんあります。たとえば日曜日の午後のイベントは避けること。お客さんが来ないので。三回目の実行委員会の時に、日曜日のほうがお客さんは来るのではないかと商店街の人たちからの声が聞こえてきたので、土日と続けてやりました。しかし特に、日曜日の夕方から夜にかけて、お客さんはどんどん帰ってしまいました。その年は大赤字で、実行委員会のメンバーは全員で補填をしました。なんといってもイベントの胴元ですから、赤字分を負担する覚悟をしていないといけないということです。

つぎの失敗ですが入場を無料にすると会場は荒れますね。公共広場とか、区役所でやるときは、おおむね入場料を取るわけにはいきません。最初の頃、杉並第一小学校は、無料で

やったのですが、皆さんが押しかけてきて会場がとても険悪な感じになった。無料ですから、大勢の方々が楽しんでいただくのはいいのですが、会場に人は溢れる、ゴミは散らかし放題。後ろで子どもが運動会状態となっても誰も注意をしない。だから100円でもいいから有料にした方がよいと考えています。路上で、区役所で、広場で、ジャズを演奏しても入場料は取れません。素人さんは、路上で演奏してもなかなか料金は取りにくい。でも、苦労してでも皆の共通の理解を得て有料にすることが大切であると感じています。ところで、会場のゴミはすごいですね。学校を借りて演奏会場にしたとき、ゴミがたくさん出てしまうとどうしようもない。処理ができないので学校に頭を下げっぱなしになる。いまではお客さんもだんだん慣れてきて、ゴミを持ち帰るようになってきましたが、平気でペットボトルを置いていく人もいます。タダより高いものはないと言いますが、そのとおりです。ミュージシャンが一生懸命にバラードをじっくりやりたいのに、大きな話声がでたり、雰囲気めっちゃくちゃになる。ミュージシャンに対して失礼ですね。

つぎの失敗ですが、お子さんの対応をしっかりすることですね。この会場は、お子さんの入場は勘弁してください、と事前によくお知らせをしておくことが重要です。たとえば、マーサ三宅さんの歌を聞くとときに、何歳の子もなら連れて行っていいか考えて欲しい。セッション並のホール後方のガラスで仕切られたボックス席なら子どもを連れてきてもいいと思いますが、まちなかの会場を使つての静かな演奏を聴く場合、お子さん連れは勘弁して欲しいのです。しみじみした曲をやっている時に、小学校に入学する前のお子さんを連れてくるのはエチケット違反ではないかとも思います。ミュージシャンは小学校なんかでやると、ブローイング・セッションとわれわれは言うのですが、吹きまくるような、叩きまくるような盛り上げ方をするときには子どもさんがいても結構なのです。しかし、しみじみした曲の時はお子さんがいても楽しめない。それから、酒場にはお子さん連れは勿論ダメですからお子さんの対応が難しい。ジャンジャンやるジャズは、誰が面白くリズムをとってもいいのですが、マーサ三宅さんなどは、しみじみとした曲を唄いますから静かに聴いてほしい。「音楽は時間芸術」とよく言いますが、一瞬でもワートと騒がれると台無しになってしまいます。一方の絵画、彫刻とかは時間芸術ではありませんので、多少の騒がしさは許容できるものです。結局は、事務局が一番大変なのです。ジャズストリートのような大きなイベントは、いろんな会場でやるから全体を把握するのが難しい。たくさん会場があってそれをバックアップするっていうのはとても難しいと思っています。阿佐谷ジャズストリートの場合、会場のオーナーさん、お店の従業員、事務局等のご好意に頼って続けてきた。会場の案内チラシなどもご好意によってタダ同然です。いずれはいろいろな形で考えないといけないと考えます。大きなイベントに育ったというより、みなさんのご好意により育てていただいたという感想です。

阿佐谷ジャズストリートは、すでに非常に大きな文化イベントの一つになっていると思います。日本のジャズの業界誌では、結構、大きく採り上げてくれる様になりました。そういった意味では、阿佐谷はまず七夕祭を思い浮かべるわけですが、これに加えて新たな魅力を作ったのではないかと考えています。この中杉通りのケヤキにマッチするイベントだと考えています。このジャズの祭りは10回できたらと始めました。始めに集まったのは10人ぐらいの人たちで、町の人たちと区役所の有志でした。お酒を飲みながら、しゃべりながら、始めたわけですが、協力をしてくれる方が多かったのでここまで来たと思います。2006年で阿佐谷の七夕祭が53回。高円寺の阿波踊りは50回ですから、ジャズストリートは、まだまだハナたれ小僧です。今年のジャズ祭りは、12回目なのですがJRの電車から見える所でやるという都会の楽しさといいますが、夕方にならば、あるいはコーヒーショップなんかでちょっとコーヒーを飲んでいたりしますと、黄昏時に電車が入って来てジャズを楽しんでいる姿を見ることができる。良い景色ですね。昼間はごちゃごちゃ汚い物も目につきますけれど夕方は穏やかですね。これは都会・都市の楽しみなのです。ホームでぼやっと眺めたりというのは都会の楽しみですね。そういうところをもっと前面に出していければと思います。

この画面は阿佐谷七夕祭ですが、とてもいいイベントだと思います。私はいつもですが、パールセンター商店街だけじゃなくて近隣の商店街の人達にもこのジャズのイベントの日だけでも夜市をやってくれないかと言っています。幸いにも、パール商店街はシャッター通りではない。地方の都市へ行きますと、どこの商店街も軒並みシャッターが降りている。訪れたこっちがうら寂しくなっちゃうっていう感じの所が多いです。幸い阿佐谷のまちはそれほどでもないのですが、胡坐をかいていけなくて言う風に思っています。チェーン店がたくさん増えまして、私なんか仕事の合間にポスターを持って行って「これ張らせて下さい」とお願いしても、店長に聞いてみないと分からない、などとなかなか答えてくれなかったりします。某チェーンは、ポスターを張らせてくれないと思います。「うちの店はそう言う方針じゃないので。地域のお祭りに付き合う気はありません」と。実際には、お客さんがたくさん来て、イベントの日は随分儲けているんだから、商売の仕方をもう少し変えてくれないかと思っています。あるコーヒーチェーンは、某店とは全然違うシステムになっていると思います。結構、地域のイベントに理解があります。「じゃあ張っておきましょうって」と張ってといてくれます。だんだんまちも商店街も変わって行きますけれど、商店の人がもうちょっとその辺を頑張っていて一緒にやれたらいいなと思います。まちの人々全体がイベントを楽しんでもらいたい。

このジャズ祭も、今年で12回目になりますが、それなりにビジネスとしてみると大きくなってきます。全体の収入が600万円とか700万円ですが、チケットの売り上げが多い時には900万円ぐらいありました。ミュージシャンも実行委員会もお金を溜めるつもりはなかったのです。

今の実行委員会の人もあまりないと思うのです。多少の運営の運転資金だけあればよいと考えているので、入った分だけ全部使っちゃうんです。出入りそれぞれが600万円、700万円という事になりますと、ビジネスとして考える人が出てくるのですね。特に音楽関係者から軋轢が出て来ます。自分の名前を前面に出したがり、自分中心にマスコミ取材して貰うように仕向けちゃったりする。それで仲違いして実行委員会の組織が壊れちゃうっていうのが結構あります。特に最初の頃は、そういう人達が何人がいらっしたんですね。自分の好みのジャズをやりたいとか、そういう風なものを持ち込んでいうのもありますね。あいつは良いけれどあいつは駄目だとかね。そういう人が前面に出て来て采配すると、みんなは白けちゃいます。案外、ジャズに詳しい人が中心になり、会長さんになったりすると面白くなくなるかもしれませんね。仲間はみんな素人で、さっき言ったまちづくりの会の人達とか、町会の人が多いですから。まちを良くしたいっていう気持ちだけで入っている人達も一生懸命やっていますから、そういう人達と上手くやれる人が中心にいないと駄目ですね。そういう点では、今、中心となってやってくれている方々、つまり、会場を貸してくれたり、一緒に運営に加わってくれている人達は、誠実さとか、心の広さとか、杉並の地域の文化を伸ばして行こうよ、面白いまちにして行こうよ、とそういう感じの人たちです。今年は12回目ですが、もともと10年頑張っただけで、10年過ぎたらちょっと空気が抜ける様な感じもありました。

今年の実行委員会は、大きく2つに組織を分けている。一つはいろいろチラシの企画をしたり、ミュージシャンとの調整とか、「うちも会場にしたい」というまちの人々からの要望なんかも調整したりする。10何年やっているうちに、熱心な若い人達が多いんですが、出てきました。そういう人達が実際にチラシをデザインしたり発注したりしますね。チケットぴあとの折衝とかいろいろやってくれる人達がいる。これとは別な組織ですが、当初から取り組んだ私達はだんだん歳をとって行きます。そういう人達は、「地域応援団」と言って、いろんなかたちで若い人の支援をしようという体制になって来ました。地域応援団を今年立ち上げました。阿佐谷パールセンター商店街の小川さんといって眼鏡屋さんがいますけれど、小川さんが阿佐谷のマイタウン協議会や地域の商店街とか町会の協議会の会長さんをやっていたので地域応援団の発起人をやっていただきました。地域応援団は、イベントの当日になればみんなで手伝いに行けばよいわけです。

ジャズというのはやはり、先ほど言いました様に、ニューオリンズの酒場あたりから始まってシカゴに行ったり、ニューヨークに行ったりして、いまでは世界中で楽しむようになっているわけです。映画とかダンスなども非常に密接な関係にあって、ミュージカルなども含めて広がってきた。そこで、このイベントもジャズだけじゃなくて映画とかダンスだとかそういったものも一緒に楽しめるような広がりとか、遊びがあるイベントにしたいという思いがみんなにあるんです。

それからジャズの楽しみを次世代に伝えるということで、子供達に対するワークショップとか、ちょっとした楽器を演奏するお手伝いも始まっています。学校の生徒さんに普段ブラスバンドを教えている先生方もその日は、ジャズを子供たちと一緒に演奏するとかですね、そういうことも実際に行われています。ジャズの楽しさを次世代の若い人達に伝えて行くことも阿佐谷ジャズストリートのためにも大きな役割じゃないかと思っています。

それから今まで恩返しも出来ていないのですが、ずっと支えていただいたジャズメンのみなさんにも報いることが必要だと思います。ジャズの演奏を出来る場をたくさんつくれるとか、気持ちよく演奏出来る場をつくれるとか、さらにはジャズ全体の、たとえばCD等を含めて売り上げが低迷していますが、そういったものも振興する勢いになればよいと思っています。

それからこの画面ですが、これは実は私の住んでいる所(杉並ではなくて、埼玉県の狭山市といいまして、所沢の1つ先、川越との間の小さなまち)なんです。そこでもやっぱり、シャッター通りがたくさんありまして、そこをなんとかしたいと、私の知り合いが地域で活動しています。建築家ですけど、そんな人達がまちおこしでやろうやと言っている。「鳥山さん、阿佐谷のイベントをいろいろ聞かせてよ」とそんなこともあったりして、地元の狭山や人間在住のミュージシャンを集めてお寺を借りてジャズをやったのです。なかなか素敵でした。この晩は四つのバンドが出たのですが、阿佐谷で演奏されている方もいらしたと思うのです。ドラマーの小林さんは人間に確か住んでおられる方です。人間のジャズクラブ、市民の愛好家も確かいろいろ活躍されていると思いました。ジャズというのは、とても若い人からお年寄りまで楽しめる音楽ですね。ロックなんかと比べると非常に幅広いと私は思います。演歌と似ているようなところがあります。阿佐谷ジャズストリートのノウハウといますか、やり方をいろんな形でお知らせしたりしています。阿佐谷ジャズストリートもいろんな各地の見本(神戸のジャズだったり、横浜のジャズだったりしました)に学ぶことができました。

最後になりますが、一番身近な行政のことをローカルガバメントとアメリカでは言うらしいのですが、アメリカの州行政は、たしかに地方政府って感じですね。日本ではそうじゃなくて、国の仕事の下請けみたいなことを沢山やっています。国民健康保険とか戸籍だとか。そういう事務は、国の事務のはずなのですが区役所がやっている。杉並区には議会もありますし、三権分立のうち司法を除く2つの権能もあります。無いのは裁判所です。私は区の職員ですが、民間に5年ほどいまして、その後区役所に入ってそれ以来30年以上区役所に勤めています。こういったまちづくりの仕事をさせていただけたことをとっても幸せだと思っています。けれども私が区役所へ入った時、こういう仕事はまだなかったのです。区役所の中で、庁舎の中で、仕事としてジャズイベントに携わるのはまず許されないような雰囲気もありました。随分世の中が変わって、行政の役割も変わってきたような気がします。

今日、こういった場で阿佐谷ジャズストリートのお話をさせていただいているのですが、私がいま思っているのは、職員は企画力を身に付けることがとても大切だということです。でも「毎日税金を集めに行っている人間に企画力を育てよ、と言ったって無理ですよ」とそう言われちゃうんです。私のこういった仕事を「手伝えない」とか、「時間が無いから」とか、「他の仕事があるからやれません」だけじゃなくて、「チラシを上手く作ってくれよ」といっても出来ない職員が結構増えています。何故かと言うと、考えなくなっちゃっているんです。自分で考える時間がない、忙しいからしょうがない、最低限のことをやれば良いじゃないか、という職員が増えている。しかしまちの人と一緒にやる、地域の人と一緒に共にやるということで意見交換するうちに、企画力が出てくるのでないか。区役所の忙しい仕事の中だけから生まれるものではないのではと考えています。つぎに、想像するということ、想像力についてですが、「一緒にやりましょう」という会話から始まった仕事を通じて気配りができる人間になってくる。私も官僚の末席にいるわけですが、私は「官僚的」にはなりたくないんです。まちの人とジャズストリートをどのように盛り上げていくかというようなことをしゃべりながら、今日は「もう時間も遅いし、いい考えが無いけど、ちょっといっぱい安いところへ行って飲もうや」という具合に話し込む。このようにして、だんだん話がふくらむし、お付き合いが太くなる。このような一見無駄なような意見交換から企画力が磨かれるように思っています。区役所の職員にはこのようなことが大切なんです。税務の仕事をやったり国民健康保険の対応をしたり、そういう人ほどこういったことが大切なのです。最近、区役所も民間の会社に研修のために職員が出向したり、半年とか一年他の自治体に行って研修をやって来なさいということで、私のところからも横浜市の都市デザイン室に一年ごとに職員に勉強にいかせたりして大分変わって来ている。役所の机で仕事しているのが即ち仕事だと思わないことが大切です。私は、あと半年ぐらいで役所を定年になります。この先どうするか楽しみにしています。どんな形でもいいから出来ればまちのこういったことにお付き合いして行きたいと思っているのです。私も聞き手の側になって各種の講座に行くこともある。市民講座に多い時は年 10 回くらい行ったことがあります。私も勉強したいし、ある大学の講座で話してくれという機会があったので、勉強ネタを仕入れに行ったり、他人のしゃべり方を勉強しにいきました。

ところで、私は、アート系のNPO法人の立ち上げにも参加して、監事を務めるために兼職の許可を得ています。お金になる話ではないけれど、自分の感性を磨くために面白いことをもっとやりたいと思っているのです。私は、区役所の職員にそれぞれ欠けているところを補うために努力して頑張れよ、と励ましたいのです。自分の住んでいるところでNPO活動をしなくてもよいと思うんです。ちょっと離れているからかえってやり易いってところもあります。私は、以前狭山の団地で、自治会が立ちあがった時に、10人ぐらいの仲間というんなイベントを仕

掛けたことがあります。商店があんまり周りになかった頃でしたので、産直なんかもやりました。イカの産地と提携して日曜日の朝に、住民にイカを買って貰ったりと、いろんなことやったのです。その時、10人前後の同好の仲間が集まれば、なんでも出来ちゃうと思いました。年齢なんか関係ないと思っています。ジャズストリートも特別にお金を何十万も出し合って始めた訳じゃないし、いろんな方々の協力でお金を出して貰っている。自分たち、つまり、発起する側の人間だけで出来たというのではない。さっき言いましたように「人のつがり」により発展的にイベントが広がっていったのです。

今日は、経験の一端をお話させていただきました。とりあえずお話は以上で終わります。どうもありがとうございました。